九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

伝中御門宣秀筆金葉和歌集

石井, 和男
九州大学文学部研究生

https://doi.org/10.15017/12399

出版情報：語文研究. 1, pp.94-102, 1951-03-10. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

新資料紹介

傳中御門宣秀筆金葉和歌集

石井和男

續群書類從所載の金葉和歌集初度本が中御門宣秀筆本の孫本であり、金葉和歌集諸異本中、重要な位置を持つことは、從來知られてゐる通りである。ところが、この續群書類從所載初度本（以下續類從本と呼ぶ）を以て代表される一群の異本は、何れもあまり系統の正しいものとは思はれず、續類從本にも多數の脫落があり、これらの祖本の出現は、久しく待望されてゐたのである。

ここに紹介するのは、九州大學圖書館所藏の宇土侯細川家舊藏本中の一册であり、內容を檢するに續類從本の祖本であることが明瞭になつたものである。

この本は縱二四糎二粍、橫一六糎九粍、胡蝶裝の一册本で、白紙が前に一葉、墨付一一五葉より成り、表紙は紗に金絲でまんじくづしに桃の實の模樣がある。題簽はない。表紙裏は金箔を貼り、その上にもまんじくづしの模樣がある。用紙は鳥の子。內題はない。二葉目の裏より書き始め、第一行目に「金葉和歌集第一」とある。行數は一面十行。各卷末に數行の餘白を殘す部分には、最後の一首を二行に書いたものもあるが、他は總べて一首一行に記されてゐる。一一五丁の表及び裏に續類從本と同じ奧書がある。しかし、これを續類從本の奧書と比較して見ると、明に後者の誤寫と考へられるものが三字ある。奧書の前半は本文と同筆であり、中御門宣秀の筆であらう。後半は別筆で、書體及び花押よりして、烏丸光廣筆と信じてよいであらう。

箱は桐箱で、上部中央に「金葉　中御門宣秀筆」と墨書され、その蓋裏には、二葉の極札がほゞ中央に、その左に書付が、夫々貼付せられ、左の通りに讀まれる。

金葉集　中御門亞槐宣秀卿
奧書烏丸亞槐光廣卿　㊞

中御門殿宣秀卿　金葉和歌集一册
奧書烏丸殿光廣卿有名判　㊞

右牛庵了珉極札　赤島アハセふくさ上包
紙數百拾六枚內白紙一枚　秤目七拾五匁
筥ノ書付濃本坊法印昭乘筆

極札の印は、夫々「牛庵」「琴山」と讀める。「赤島アハセふくさ

上包」と言ふのは、紛失されたか見當らない。「筥の書付」と言ふのは、箱の表書のことであらう。又箱の底には、

此金葉集初度奏覧
の本と存上候　板本
にも合不申　三度之本
とも相違仕　世間比類
無之候上　烏丸光廣
卿奥書珍重御座候
弘賢

と書いた紙が貼ってある。筆蹟署名その他から屋代弘賢の筆であると考へられる。

本書の本文を續類從本と比較して見ると、次の如く後者に脱落してゐる三十五首を補ふことが出來る。

(A) 巻二の最後〔以下闕〕とある所に

夏の夜の月待ほとに手すさみに岩もるし水いく結しつ
源　有　政

六月　拔戀心を

みそきする河せにたてるゐくゐさへすりぬきかけてみゆるけふかな
中納言顯隆

秋隔一日といふ心を

みそきする汀に風の涼しきはひと夜をこめて秋やきぬらむ
藤原季通

六月　拔心を

けふくれはあさのたちえにゆふかけて夏みな月のみそきをそする

(B) 巻三の巻頭に

金葉和歌集第三

秋部

百首哥中に秋立心を
春宮大夫公實

とことはに吹夕暮の風なれは秋立日こそ涼しかりけれ
太宰大貳長實

野草帶露といふ心を

まくすはふあたのおほのの白露をふきなはらひそ秋の初かせ
皇后宮美濃

待草花こゝろを

ふちはかまはやほころひてにほはなむ秋のはつかせ吹たゝすとも

(C) 巻三「稻葉ふく風の音せぬ……」の次に〔題闕〕とある所に

山家秋と云ことを
藤原行盛

山ふかみ問人もなき宿なれとそともの小田に秋は來にけり

師賢朝臣の梅津に人々まかりて田家秋風といへることを
大納言經信

よめる

夕されは門田のいなは音傳てあしのまろ屋に秋かせそ吹
大江公資朝臣

みか月の心を

山のはにあかていりぬる夕月夜いつ有明にならむとすらん
藤原忠隆

攝政左大臣家にて夕月夜の心をよめる

風ふけは枝やすからぬ木の間よりほのめく秋の夕月夜かな
大納言經信

後冷泉院御時殿上哥合月の心をよめる

月かけのすみわたる哉天のはら雲ふきはらふよはのあらしに
法橋忠命

月旅宿友といへる心を

草枕この旅ねにそ思しる月よりほかの友なかりけり
顯仲卿女

閑見月といへることを

もろともに草葉の露のおきぬすはひとりやみまし秋の夜の月

翫明月といへることを　　前中納言　伊房

（D）巻三「いかにしてしからみかけん……」の次に「歌闕」とある所に

こよひわかかつらの里の月をみて思のこせることのなきかな

旅宿月といへることを　　藤原　有業

たひねするなにはの浦のとま屋やたもろともにしもやとる月かな

承暦二年内裏哥合に　　春宮大夫　公實

くもりなき影をとゝめは山のはに入とも月をおしまさらまし

宇治前太政大臣家の哥合によめる　　皇后宮　攝律

てる月の光さえ行宿なれは秋の水にもつらゝゐにけり

源俊頼朝臣

山のはに雲の衣をぬきすてゝひとりも月のすみのぼるかな

水上月を　　攝政左大臣

あしねはひかつみもしけきぬま水にわりなくやとる夜はの月哉

宇治前太政大臣家の哥合に月の心をよめる　　一宮紀伊

饒山峯よりいつる月なれはくもる夜もなき影をみるかな

秋なにはのかたにまかりて月のあかゝりける夜くしたりける人に　　參議師頼

いにしへのなにはのこと思出てたかつの宮に月のすむらん

（E）巻八「よとゝもに袖のかはかぬ……」の次に

晩戀といへることを　　中納言　雅定

あふことのこよひと思はゝ夕つくひいる山のはもうれしからまし

戀の心をよめる　　右兵衛督　伊通

山の井の岩もる水にかけみれはあさましけにも成にけるかな

皇后宮にて人々戀哥つかうまつりけるによめる　　太宰大貳　長實

みちのくの思ひしのふに有なから心にかゝるあふの松はら

ならの人々百首よみけるに恨の心を　　權僧正　永緣

おもはんとたのめし人の昔にもあらすなるとのうらめしき哉

戀の心をよめる　　隆源法師

くるゝまもさためなき世に逢事をいへともしらて戀わたるかな

源家時かれ〳〵になりけるを恨てつかはしける　　前中宮越後

人心あさ澤水のねせりこそこるはかりにもつまゝほしけれ

戀の哥十首人々のよみけるにたちきゝてこふといへること

とをよめる　　修理大夫顯季

わきもこかこえたちきゝしから衣そのよの露に袖はぬれにき

われをはかれ〳〵になりてこと人のかりまかると

（F）巻八「もらさはほそ谷川の……」の次に

おとこのかたゝかへにものへまかると申けれはつかはしける

君こそは一夜めくりの神ときけなにあふことのかたゝかふらん

朝戀をよめる　　藤原顯輔朝臣

あつさ弓かへる朝の思ひにはひきくらふへきことのなきかな

（G）連歌の最後　　律師慶運

むめのはなかさきたかみのむし

あめよりはかせふくなとやおもふらむ　　まへなるわらは

瀧のをとのよるまさりけるをきゝて　　よみ人しらす

よるをとすなりたきのしらいと

くりかへしひるもわくとはみゆれとも　　頼美法師

うのみつにうかへるをみて

あらふとみれはくろきとりかな　　よみ人しらす

さもこそはすみのえならめ夜とゝもに

はしらをみて　　なりみつ　成光

おくなるをもやはしらとはいふ　　觀暹法師

見わたせはうちにもとをはたてゝけり

七十になるまてのそむつかさなともかなはてよろつにあ

やしきことなとおもひつゝきてよめる　　みなもとのとしより

右の三十五首が傳宣秀筆本に記されてゐる位置を示すと

A（二十八丁裏の全部）

B（二十九丁表の全部）

C（三十一丁裏・三十二丁表の全部）

D（三十四丁裏・三十五丁表の全部）

E（七十一丁裏・七十二丁表の全部）

F（七十八丁裏の三行目より七行目までの五行）

G（百十三丁裏・百十四丁表の全部）

となる。井上通泰博士は『類從本の編者はおそらく宣秀筆本ならぬ傳本に據れるにて脫漏は傳寫の際に生ぜしなるべし」と言つて居られるが、今宣秀筆本を見るに、博士の推定が正しかつたことを知るのである。即ち續類從本の編者は、直接に宣秀筆本を見たのではなく、宣秀筆本を祖本とし既に傳寫の間に脫落を生じてゐる本を底本として、これに校異を附して續群書類從に收めたものであらう。

右の三十五首以外には、兩書の間に歌の出入・順序の前後した所を見ない。これに比して松田武夫氏の紹介された圓林文庫舊藏本は、松田氏の言はれる如く「その轉寫の系統を異にするもの」であり、私見によれば、宣筆筆本を祖本とし、度々の傳寫の間に多數の小さな誤寫・脫落を持ち、一部は流布本によつて本文を補訂したものと考へられる。この事については、又稿を改めて論ずる機會を持ちたいと思ふ。

更にこの傳宣秀筆本が續類從本の祖本であることの動かせない證據として

一、歌ばかりでなく題詞や作者名の夫々について見ても、續類從本にあつて傳宣秀筆本に缺けた所は一つも見られず、傳宣秀筆本にあつて續類從本に缺けた所が四所見られること。

一、本文の小さな相異を比較すると、殆んどが續類從本の誤寫と考へられること。

一、右の部分を、傳宣秀筆本について見ると、まぎらはしい書体で書かれてゐるものが少なからずあること。

一、傳宣秀筆本に明らかに誤と思はれる所を續類從本にそのまゝ寫されてゐる部分が多いこと。

等を擧げることが出來る。

次に、傳宣秀筆本には、異本との校合書入（この異本の性質は不明、或は二種類以上の本かも知れない）・訂正（みせけちにして、右に正しい文字を記してゐる）・脫落文字の補入・作者名に小字で註を付したもの・片假名で讀假名を付したもの等がある。これらの部分が續類從本では如何に記されてゐるかを調べた結果は次の通りであつた。

傳宣秀筆本		續類從本		
校合書入	16	そのまゝ寫した所	14	
		誤寫した所	1	
		傍註として記してゐる所	1	
訂正	20	訂正された本文を採用	14	
		訂正されない本文を採用	3	
		異本との校異として	1	
		脫落歌の中にあるもの	1	
		誤つた本文を作り上げたもの	1	
補入	11	補入された本文を採用	11	
作者名の註	4	そのまゝ書寫	1	
		脫落歌の中にあるもの	1	3
讀み假名	1	そのまゝ書寫	1	

右のうち校合書入が傍註となつてゐるのは

秋イ〔秋歟〕

朝ことに　朝こ とに（續類從本P.58上L.9）

訂正が異本との校異と記されてゐるもの

浪かけて　よイ　浪かけて（續類從本P.55上L.5）

訂正が誤つた本文に作られてゐるもの

佛きやう　佛くきやう（續類從本P.83上L.11）

である。又右に示したもの以外、續類從本に校異書入（ここに言ふのは傳宣秀筆本にあるものと同じ形式の校異、即ち片假名でイとして示してあるものに限り、後に示す（流布本）として書入れたもの及び疑問として〔歟〕と記したものを除く）及び讀假名を附した所はない。國歌大觀番號704番の歌の作者「前太政大臣家ゆふして」は傳宣秀筆本に一行に書かれ、續類從本に前半が小文字で註の如く記されてゐるが、この他に續類從本で作者名に註を付した所はない。

右にあげた部分は、何れも傳宣秀筆本獨特のものであらう。これらが殆んどそのまゝ續類從本に記されてゐるのである。これよりして、續類從本の底本がその祖本に忠實ならむと意識して寫されたこと、及び傳宣秀筆本に於けるこれらの校合・訂正・補入・註・讀み假名が可成り古くからのものであらうこと（本文と同筆らしくも見えるし、光廣が奥書を加へる以前からあつたと證據づけることが出來さうにも思はれる）がわかる。

次に傳宣秀筆本と續類從本との校異を擧げる。續類從本の本文は、明治四十三年九月經濟雜誌社發行のものにより、底本の相異と考へられるものも、續類從本編纂者の加筆と思はれるものも、傳宣秀筆本と異る部分はすべて擧げた。この中には誤植によるものもあるかも知れ

ない。但しこの稿で既に示したものは除いた。

傳宣秀筆本	續類從本	同上頁段行數	國歌大觀番號
卷一			
閑庭・梅	閑夜・梅	44下10	19題
に・	〔に歟〕より	44下15	20題
かをは	〔を歟〕かせは	44下18	21
雅家卿・家・歌合	雅家卿歌合	45下3	
春とやは見る	春とやも・見る	45下16	33
立かとそみる	〔か歟〕立ことそ見る	47上3	
つもら・	〔ら歟〕つもり	47上5	
それさへ	それら・へ	47上7	
櫻なみよる・	櫻なみより〔る歟〕	47下3	60
藤・原長・實・	ナシ	47下19	67作者
みてまかりたりける	まかりたりける	48上5	
なかきよの	なきかよの	48下2	73
ちりみちにけり・	ちりみちにける・	48下10	
大・納・言・經・信・	ナシ	49下4	89作者
心を	ことを	49下8	91題
卷二			
三月盡によする戀といへることをよめる	ナシ	49下14	96題
卷第二	第二	50上3	
冬こもりすな・	冬こもりする・	50上20	103
よかれかちなる	よかれかほなる	51上16	119
きゝもわかす	きゝもあかす	52上11	130
うきねはかりに	うきぬはかりに	53上15	147
夏月如秋といへることをよめる	夏月如秋を・	53下3	150題
卷三			
勝・超・法師・三宮イ	勝・赴・法師・三宮イ	54下15	172作者
人にかたらは・	人にかたらん〔は歟〕	55上16	189
といへることをよめる	といへることを	56上11	202題
杉まもりくる	杉もゝりくる	56下1	
露はかりこそ	露計とそ〔こ歟〕	56下19	
かりそめにゐる雲たにもなし	假初にたにゐる雲たにもなし〔衍歟〕	57上13	
あかゝけるころ・	あかゝけるこの〔ろ歟〕	57下13	229題
あり明の月・の月影に	あり明の野の月影に〔かたの（流布本）〕	58上9	236
にほふ	〔に歟〕よほふ	58下6	242

玉かつら	〔つ歟〕玉かさら	58下12	245
まかりたりける	まかりける	59下4	261題
涙とやみん	涙とやせん	59下16	264
大井の	大井川の	59下21	267題
鴨鳥は	鴨鳥は	60上2	267
青羽も	〔羽歟〕青葉も	60上2	267
筏士は	筏士も	60下15	280
月清み	月清く	61上8	286
法橋有禪	ナシ	61上19	
ほきのかけくさ	ふきのかけくさ	61下13	296
榊はや	柳はや	62下21	314
かせとしらすや	〔け歟〕かせとしらすや	63下19	329
いとはるれ	祝はるれ	64上2	331
たれか千代にも	君たれか千代にも（流布本）	64上2	331
備中國二萬里	備中國　萬里	64上20	339題
といふさとを	といふことを	64下2	340題
神もあはれと	〔も歟〕神にあはれと	64下12	343
みか月の	みつ垣の（流布本）みか月の	65上5	349

巻四　巻五

千度みるまて	〔み歟〕千度ちるまて	65上11	351
まさこのいろも	まさこのいろも（流布本）	65上14	352
丹後になりて	丹後〔守歟〕になりて	65下3	355題
袖のぬれける	袖はぬれける	65下19	360
なさけ忘るな	なさけ思ひな	66上11	365
さきたちにけり	さきも立けり	66下5	371
戀部上	戀部	66下7	
うはゝに	うはらに	66下12	373
寄水鳥戀（邊イ）	寄水永戀（邊イ）	67下1	387題
うたかはれける	うたかはれけり〔る歟〕	68上19	404
立やあさまの	戀やあさまの	69下3	245
艷書會に	艷書會に〔合歟〕	69下17	432題
くれともとゝまらす	くれととゝまらす	70上20	444題
なりにけれは	なりけれは	70下17	450題
ちきらさりしを（にイ）	ちきさりしを（にイ）	71上3	452
いふもはたのみ（ヒイ）	いふもはたのみ（こイ）いふもたのみの（流布本）	71下2	469
しのはさりけり	しのはさりけり〔れ歟〕	71下11	473

巻六　巻七　巻八

つまならむ	月ならん	72上2	478
なこえにあまる	なきさにあさる（流布本）なこえにあまる	72上16	483
をとつれさりけれは	をとつれなけれは	73下8	508題
思はむ人は	〔む歟〕思はぬ人は	74上14	521
まろかほたし	まろのほたし	74下3	528
近江には	近江にそ	74下14	535
とはれなからも	とはれぬなからも	75上1	542
雑部上	雑部	75上16	
君そかたらむ	君にかたらん	75下11	555
花の宮こに	花の色々に	76上7	560
まてはなと	さていると	76下7	567題
笙の岩屋	大峯（流布本）笙の岩屋	76下10	568題
またひさしく	ひさしく	76下13	569題
橘能元	橘能光〔元歟〕	77上4	574作者
あらくましく	あらく申して	77下8	583題
をこせ侍ける	〔か歟〕をこせ侍ける	77下9	583題
殿ゐものれう	殿ゐものゝれう	77下16	585題
ほと過て	ほとへて	77下16	585題

給	給ふに〔衍歟〕	78上2	586題
平康貞女	平康具女〔貞歟〕	78上9	590作者
おはしつ	おはしつ〔ろ歟〕	78下5	593題
おはしてまかりぬ	おはしてまかりぬ〔ろ歟〕	78下7	593題
なりにけり	なりにける	78下12	594題
をきたりける	をりたりける〔き歟〕	79上12	601題
かへして	かくして	79上17	602題
あらすをは	あらませは	79下4	603
いれたり	つれたり	79下19	609題
あまたまちけるに	あまたまかりけるに	80下4	614題
かゝみをとかせ	かゝみをゝかせ	80下7	615題
なりゆけと	なりゆけは	81上4	622
かはらけとりて	つかはしけるとて	81下9	629題
なりにしものを	なれにしものを	82上19	639
申文にそへて	申文そへて	82上20	640題
かへりてのち	かへりのち	82下14	644題
なに事かある	なに計かある	82下15	644題
知信より	和信〔知歟〕より	83上6	647題

ひとつまきゑの	〔と脱歟〕ひとつまきゑの	83上15	650題		
かなしけれとも	かなしけれと	83上21	651		
あはのかみ	もあはのかみ	83下1	652題		
申けれは	申けは	84下3	652題		
れいならぬ	れいらぬ	84下5	669題		
みやに	みやこに〔衍歟〕	84下20	667題		
しらさらめやは	しらさらめや 脱歟				
まとはすな	まとはする	85上1	667		
さとなる	まとなる	85上9	671題		
欲命臨時	欲命終時	85上4	668		
導かれけり	導かれけり〔る歟〕	85上17	674題		
衣の玉を	衣の玉と	85下12	681		
うせけんと	うせけんと〔た歟〕	86下19	683		
ときなれて	ときなれて〔は脱歟〕	86上9	689題		
もゝそのを	もゝそのゝ	86下18	691題		
むめつの	むめすの	86下6	693題		
かものへまかりける	かものへまかりける〔社脱歟〕	86下7	693		
ちりてふことそ	ちりてふことそ〔る歟〕	87上13	702題		
		87下3	704		

連歌

かせのまに〳〵	かけのまに〳〵〔せ歟〕	87下4	704		
すまひくさ	すまひくさ〔す歟〕	87下5	705題		
有簾細雨三云々	有簾細雨之本云々	87下14			
天治元年奉之	天治元年奏之	87下15			
手記也	手跡也	87下16			

奥書

以上私は新資料紹介と稱して些細なことを詳しく論じ過ぎたやうにも思はれる。しかしこれは決して無意味であるとは考へない。何故ならば、私はここに、傳中御門宣秀筆本を紹介し、これが續類從本の祖本であることを論證したに過ぎないけれど、この本の出現は今までの金葉集研究に對し反省の機會を與へるものである。即ちこの系統の現存諸本が何れも不完全又は諸寫の多い爲に、從來金葉和歌集研究家が出現を期待してゐた傳宣秀筆本が發見されたからである。しかし、これが金葉集撰集途上の一時期を示してゐる筈の原本とは、約四百年の年月を隔てて成つたものであり、本文中に既に誤寫されてゐる部分がある事は、流布本との比較によつて明かであらう。續類從本に多數の傍註（……歟として編輯者の疑問としたもの）を存するのも、大半はその祖本である傳宣秀筆本に誤があることに起因すると思はれる。又この本の後半に對しては、從來も疑問を持たれたことがあるが、その疑問及びその他の問題にも解決が與へられるであらう。それは次の機會に讓りたいと思ふが、其の爲に敢へて詳細に紹介させて頂いた次第である。